

「えんこ」

かんべなかわむら
鴨部中村のお話

えどじだい ころ はなし
江戸時代の頃の話だそうです。中村にはかわいらしい化け物
なかわむら
が住んでいました。
す

まるがお からだじゅう
丸顔で目が大きく身体中そばかすだらけ、それをこの村の人
よ
たちは、「えんこ」と呼びました。このえんこは、この中村の川の深
ふか
い所に住んでいました。彼は大へんないたずら者でした。川に子
もの
どもが遊びに行っていると、「ぬっ」と現れて足を引っぱって喜ん
あらか
でいました。
よろこ

ごご しょうや
ある日の午後、庄屋の旦那さんが馬を連れて川岸を歩いてい
うま つ かわぎし ある
ました。疲れたので馬を川岸の木につないで、そこでどっかりと腰
つか
を下ろして昼寝をしていました。意地悪なえんこが、これを見逃
ひるね いじわる
すはずはありません。
みのが

ちからまか
彼はさっそく馬の足に手をかけて、力任せに「グイッ」と引っぱ
ひ
りました。だけど何と言っても馬には勝ちようがありません。蹴
なん か
られた上に馬に引っぱられて庄屋の家まで連れていかれました。
うえ
このことを知って村人たちは、えんこを白にくくりつけました。
し むらびと うす

えんこは逃にげようと思っても力ちからが入りませはいん。お皿さらの水みずがすっかりかわいていたからです。

その日は満ひ月まんげつでした。どうしてこう、月つきというものは化ばけけ物ものの味み方かたなんでしょう。

月まうえがえんこの真ま上うえに來た時き、だんなさんのおおばあさんが、バケツおに水もをくもうと思もって、ひしゃくを持もって彼まの前まえを通とおりました。そして、えんこを見て、

「このえんこめが。」

とあたまいって、えんこの頭あたまをひしゃくでたたきました。このひしゃくすこに少しの水すこがついていたのです。水えを得えたえんこは急きゆうに勢いきおいがついたので、石臼かを背負かったまま逃かげていきましたが、石臼かを担かいだままなのでつかすぐに捕つかまってしまうました。だんなさんが

「もうあんないたずらは決けしてしないと約やく束そくするならお前まえを助たすけてやろう。」

となみだいうと大きな目なみだになみだいっぱいの涙なみだをためなみだてうなずきました。そして、紙かみに「いたずらは決かしてしません。」と書かき、はんこを押おしたそうです。それから、この中村へいわには平和へいわが續つづき現げん在ざいに至いたっているということです。